

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
第17号 1992. 1, 13

発行

北海道ポーランド文化協会
〒060 札幌市中央区南2東2
河合楽器製作所北海道支社内
電話 011-231-8661
FAX 011-221-4936

第五回総会終わる

新年度へむけて第一歩を

北海道ポーランド文化協会第五回総会が、去る十一月八日、すみれホテルで開かれた。

今村会長の挨拶のあと、一九九〇―一九九一年度事業および決算についての報告があり、続いて一九九一―一九九二年度の事業計画と予算案の提案が行われ、いずれも了承された。また、新しい運営委員等の選出が行われた。

一九九〇―一九九一年度の決算 (主な項目)

(収入)

会費収入	五八二、〇〇〇円
その他	四八〇、七七二円
繰越金	六二六、〇一七円
仮受金	四三、四〇〇円
合計	一、七三二、一八九円

(支出)

事業費	七四五、七三五円
連絡費	七八、七四四円
会合費	一三、七八一円
合計	九九九、五六九円

之氏の講演会、ポーランド料理講習会などの催しがこの期間中に行われた。

一九九一―一九九二年度の事業計画

- 一、通常例会四回程度。講演会、映画会、音楽会など。
- 二、ポーランド語講習会。
- 三、「ポーレ」の発行。

一九九一―一九九二年度予算案

(収入)	
会費収入	六〇〇、〇〇〇円
繰越金	六二九、二二〇円
その他	一一〇、四〇〇円
(支出)	
事業費	四三〇、〇〇〇円
会合費	一四〇、〇〇〇円

このあと、一九九二年一月から事務局が移転することが提案され了承された。(詳しくは本誌二ページ参照)

主な活動

- 一、十月二十八日 第十二回例会「創立三周年記念演奏会」―十名の入々によるピアノ演奏や独唱など。教育文化会館小ホールにて。
- 二、一月十日 「吉田勝一氏を囲んで」―ポー日協会の活動やポーランドの最新の事情など。クリスチャンセンターにて。
- 三、六月十七―二十九日 十三日間にわたり、国際交流プラザおよび天神山国際ハウスにおいて、ポーランドの絵本および原画展、児童画および人形等の展示を行った。さらに内田利沙子氏、遠藤道子氏、伊東孝

入った。このあと、ポーランドからのお客様約十三名（この中には十一月九日に講演をされたスタシス・エイドリゲヴィチウス氏 夫妻も含まれている）をまじえてなごやかな会食が行われた。ついで霜田千代磨氏の解説で、ポランスキー監督の短編映画「タンスと二人の男」、「デブとやせっぽ」、「哺乳類」の三本が上映された。どの作品も非常にユニークで、新しい作品であった。

このように、いろいろな企画を盛り込んだ総会と懇親会を終え、北海道ポーランド文化協会は次の年度への第一歩を踏み出した。

スタシス

おおいに語る

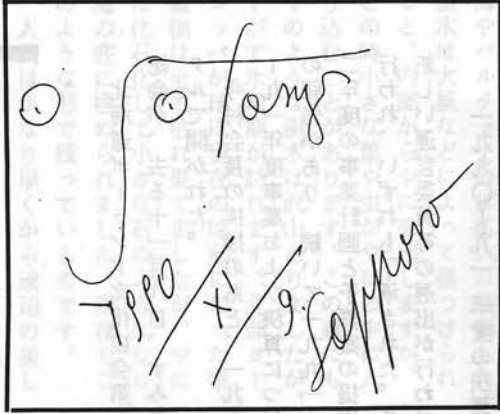
ポーランドの著名な画家、スタシス・エイドリゲヴィチウス氏の講演会が、去る十一月九日（土）午後一時より札幌市教育文化会館三階の研修室で約三十名の聴衆を集めて行われました。

スタシス氏はまず黒板に図案化した自分のサインを描き上げ（下の図）から、ゆっくりとした口調で話し始めました。日常的な街角の風景や、野原や畑にあるなげない自然を素

事務局が河合楽器に移転

本年一月一日より本協会の事務局が従来のND画廊から左の場所に移転しました。問い合わせや連絡などは新しい住所をお願いします。

○六〇 札幌市中央区南二条東二丁目 河合楽器製作所北海道支店内
（戸田長裕 電話 231-4981、ファックス 221-4982）



材にして、どのようにしてあの個性あふれる芸術作品を作り上げるかを具体的にわかりやすく説明してくれました。講演のあと参加者から活発な質問があり、二時間余の講演会を終えました。

ハリリーナさんを囲む

楽しいポーランド語

●第九期のポーランド語講習会を開きます。
今期は前期に引き続いて初級の勉強を行います。初めての方も歓迎します。

【期 間】 一九九二年一月二十二日（水）より三月二十五日（水）までの十週

【時 間】 毎週水曜日の午後六時三十分から午後八時三十分までの二時間

【会 場】 北海道クリスチャンセンター
（住所）札幌市北区北七条西六丁目
（電話）七三六一三三八

【講 師】 熊倉ハリリーナ先生

【授業料】 一万円二千円（十回分）

【申込先】 北海道ポーランド文化協会事務局（〇六〇）札幌市中央区南二条東一丁目、（株）河合楽器製作所北海道支社内（戸田長裕気付）電話〇一一二二二一—八六六一

または灰谷（札幌市東区北四十条東十丁目、電話〇一一七〇二—四九三九）まで

第十六回例会のお知らせ

●北大スラブ研究センターに滞在中のカナダ・アルバータ大学のエドワード・モジエイコ教授をお招きして講演会を行います。また、講演のあとポーランド大使館提供のビデオ上映会を行います。多数ご参加ください。

一、講演「ポーランド文学の新しい潮流」

エドワード・モジエイコ教授（カナダ・アルバータ大学比較文学部長）

（モジエイコ教授は二十世紀ロシア・ブルガリア文学を専門とし、Socialist Realism: Theory, Evolution, Decline (1977): Between Anxiety and Hope: The Poetry and Writings of Czeslaw Milosz (ed., 1988) などの著書があります。スラブ研究センターではロシアアバンギャルト（その文芸活動のダイナミズムと構造）について研究されています。）

二、ビデオ上映会「マゾフシェ舞踊団—ハイライトフィルム」

（上映時間一時間二十二分）

【日時】 一月二十五日（土）午後一時から三時四十五分まで

【場所】 札幌教育文化会館三階小研修室

（札幌市中央区北一条西十三丁目、電話〇一一二七一一五八二二）

【入場料】 無料

※休憩時間を利用して簡単なポットラック方式（持ち寄り方式）のパーティーを行います。何か適当な食べ物をご持参くだされば幸いです。



催しもの案内

ガイクとシヨパン

ポーランド舞踊とシヨパンの夕べ

シヨパンを生んだ国ポーランドから、かぎりない愛と友情と平和をお贈りします。あざやかな民族衣装、迫力のダンス、そして情感あふれるメロディ、この素敵な感動を、あなたに。



札幌公演 二月五日（水）、六日（木）、七日（金）

札幌道新ホールにて

旭川公演 二月八日（土）

旭川公会堂にて

岩見沢公演 二月九日（日）

岩見沢市民会館ホールにて

【出演】 ポーランド国立民族舞踏団「ガイク」（いずれも午後六時開場、六時三十分開演）

【入場料】 ビアニストイヴォナ・クリマシエフスカ

【主催】 大人二〇〇〇円、小人一五〇〇円（税込み）

【後援】 生活協同組合市民生協コープ札幌

【後援】 北海道ポーランド文化協会

※チケットのお求め、お問い合わせは、コープさっぽろ各店のサービスカウンターまで。

琥珀—北方の金

ザボトニク・ピオトル

私はポーランドの出身ですが、約二年前に札幌の女性と結婚してこちらに来ました。NOKENインターナショナルでポーランド、ヨーロッパと日本の橋渡し、輸入の仕事をしています。

今日は、ポーランドの美しい琥珀にまつわる面白いお話を紹介したいと思います。

ギリシャ神話にも

ポーランド・ドイツ・デンマークの北部の海岸では、現在でも嵐の後には多くの人が果まり、波に打ち寄せられた黄色や暗赤色の小さな石を採る光景が見られます。これが英語でいうアンバー、すなわち琥珀です。ギリシャ神話にも琥珀にまつわる次のような話があります。

「あるとき女神が地上に降りてきて、人間の男性に恋をしました。しかし、これは許されることではありません。神の国の掟により、女神は追放されて、神としての力を失いました。これからは、限りある命をもった人間として一生涯に生きなければ

なりません。女神はとても悲しみました。この時流した涙がのちに琥珀となりました。」

さて、現実に戻りますが、琥珀は樹木から出る脂(やに)が化石化したものです。約五十年前、今の北海やバルチック海は広大な森でした。樹木は大風などによって傷つけられると、内部からやにを出しますが、この時小さな葉や虫がやにの中に入り込むことがあります。この森にもそのような樹木は沢山ありましたが、やがて氷河期が訪れます。北部ヨーロッパがほぼ現在の地形になった頃、植物は全て枯れ果てましたが、やに化石して小さな石のようになり、海の底に埋められました。現在もこのような形で残っているのです。

人間はかなり早くから琥珀の美しさに魅せられたようで、三万年前に作られたと思われる首飾りが見つかっています。細工技術は時代と共に向上し、装飾品のみならず、戸棚や机といった家具も琥珀で飾られるほどになりました。十四世紀から十八世紀にかけて琥珀芸術は最も開花し、

北はスカンジナビアから南はアラビア、西のフランスから東のロシアにいたる各国に広まりました。特に北ドイツ、デンマーク、ポーランドといった琥珀の産地では数多くの芸術品が生まれています。一キログラムの琥珀は金一キログラムに匹敵するとまで言われました。

琥珀の部屋

「琥珀の部屋」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。一七〇一年、時のプロイセン王フリードリヒ三世は、ベルリンにある宮殿に琥珀で飾った部屋を作らせました。王亡きあと、後継者によってロシアのピョートル大帝に贈られ、サンクト・ペテルスブルグの冬の宮殿に運ばれたのです。その後、女帝エリザベータの命により、夏の王宮に移されました。この部屋は壁に琥珀のモザイクがほどこされ、そこに大きな鏡が掛けられていました。陽光に輝く美しさ、さらに蠟燭の炎に照らされて放つやわらかな輝きは幻想的で、息をのむほどの美しさだったと伝え

られ、世の七不思議の一つにあげられていました。しかし、第二次大戦中にドイツ軍の手により解体され、ドイツに移送されたらしく、行方は現在わかっていません。

さて、十九世紀に入ると、バルチック海沿岸が琥珀の主要産地となり、今に至っています。細工技術が最も美しいのはグダニスクを中心とする北部ポーランドと言われていましたが、琥珀の部屋を作ったマイスタもこの地方の出身だったそうです。長い経験を要する手作業による細工は、今再びその価値を認められ、ネットワークス・ブローチ・指輪など、芸術性の高いアクセサリーとして、琥珀は世界百ヶ国以上の女性に愛されています。

また、美しさもさることながら、幸運を呼ぶ石としても有名で、さらにリュウマチや神経痛を治す効果もあるのです。しかしながら、琥珀についてはまだ不明な点も多く、神秘のベールに包まれているのが現状で、実は女神の涙であったという神話も全くは否定できないかも知れません。

「ポーレ」編集委員会

小笠原正明・斎田道子

清水保子

〔連絡先〕62-1738(斎田)